川崎医療福祉学会誌　Vol. 15　No. 2　2006　329–338

原　著

*A Fairly Honourable Defeat*における善と悪の相克

橋　本　信　子[*1]

要　　約

人間は人から羨まれたり賞賛される人物に欠点を見つけたいものだと，悪魔性を持つジュリウスは，人間の本性について鋭い指摘をする．人々の愛の絆，善人である自信などがいかにもろいものであるかを，ジュリウスは暴露していく．彼の用いる “a puppet show” という言葉は，作中人物が彼の悪意に翻弄されることを示している．善人と自負するルパートはジュリウスの標的とされる．この二人における善と悪の闘いは，完全にルパートの負けであったが，悪魔的ジュリウスもキリスト的タリスの善に反応し，人間性を示すようになる点では，善の完全なる敗北ではなかった．ジュリウスの描写には「オセロ」のイアゴとの共通点が多く見られるが，前述の点から，ジュリウスはイアゴのような骨の髄まで悪魔的な人物とは異なっている．このことから，マードックは独自の悪人像を作り上げたと考えられる．

1970年出版のアイリス・マードックの *A Fairly Honourable Defeat* という奇妙なタイトルがつけられたこの作品は，当時 “This is a novel about the almost mechanical effects of vanity, lying, and fear in a situation where imperfect human beings are related to each other by obscure and deep bounds.” [1] と評されている．この作品にはヒルダとルパート，アレックスとサイモンの二組の愛し合うカップルが登場する．しかし，悪魔性のジュリウスの策略によって，どちらもその愛が危機に陥るが，一方は崩壊し，一方は一層強い絆で結ばれる．人々がどのようにジュリウスの悪魔性に弄ばれるか，道徳の本を執筆する人間にふさわしく模範的な暮らしを送るルパートは人を善導出来るのか，書評に述べられている作中人物の持つ虚栄心，虚偽，恐れとあわせて考察する．

不吉な前兆

結婚20周年を迎えたルパートとヒルダが，客の到着前のひと時を庭でシャンパンを飲みながら語らう平和な冒頭のシーンには，その後の混乱を暗示する要素がいくつも含まれている．ルパートは妻を愛し，秩序を重んじる真面目な公務員である．彼は仕事に励み，道徳的模範を示していると自認している．仕事の傍ら８年の歳月をかけて執筆してきた道徳に関する本も，ほぼ完成に近いことはこの夫婦の喜びである．愛情深いヒルダは慈善団体の会合に進んで出席し，寄付にも励む．模範的な社会人であるこの夫妻の最近の贅沢は，庭にプールを作ったことだ．このプールは折にふれ，人々に団欒の場を提供する．ことにルパートの弟のサイモンは泳ぐのが大好きで，このプールが出来たお陰で，この家に立ち寄る回数が増えたことを心やさしいヒルダは喜んでいる．ルパートも “Swimming refreshes the soul,” [2] とプールで泳ぐ効能を認めている．ルパートは道徳を説くが，頭の固い道徳家ではなく，自分の友人のアクセルとホモセクシャルの関係にあるサイモン，夫のタリスを捨ててルパートの友人のジュリウスとアメリカで暮らすヒルダの妹モーガンをも理解しようと努めている．

妹のモーガンが突然ロンドンに帰ってくると知らせてきたことや，父親と折り合いの悪い息子のピーターがケンブリッジ大学に入学したものの，大学に行かず学業を怠って怠惰な暮らしを送っているなど，幸せなヒルダにも心配事がないわけではない．妹を愛するヒルダは，ジュリウスと別れた妹が異国で一人で苦しんでいるよりは，自分の元に戻ってきてくれることに安堵感を覚えているし，父親とは不仲でも自分とピーターとの間には心が通っていることで自分を安心させようとしている．

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
（連絡先）橋本信子　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-Mail: nobukoh@mw.kawasaki-m.ac.jp

タリスとモーガンの結婚にはヒルダは初めから懐疑的で，いずれは破綻すると考えていたが，夫のルパートは結婚の絆をもっと大切に考える．“You are too sentimental about the marriage bond, Rupert.... One's got to be realistic.”（15）と妹夫婦に関して言うヒルダを，ルパートは “What a thing to say to me today of all days, my darling!”（15）と言って，「よりによってこんなめでたい日に言う言葉ではない」とたしなめる．自分達の結婚の揺るぎなさを確信しているヒルダは，皮肉にもここで結婚の絆のもろさに言及しており，幸せの絶頂にあるヒルダのこの言葉は，この夫婦の今後を暗示しているようである．“I absolutely trust its absolute rightness. God bless you, my darling. Here's to the next happy twenty years.”（27）と言うヒルダは夫に全幅の信頼を寄せ，この結婚の幸せが続くことを固く信じているが，サイモンとそのパートナーのアクセルも加わったその日の祝いは，突然のモーガンの帰国で中断されてしまう．

作中，祝いはことごとく中断される．結婚20周年の祝いはモーガンによって，アクセルの誕生日のディナーとルパートの本の完成祝いのディナーはジュリウスによって，途中で台なしにされてしまう．これも不吉な感じを与える．

プールの 2 面性

結婚20周年記念の祝いの日，到着後，サイモンはプールサイドに座って足を水中につけて楽しんでいる．この日突然アメリカから帰国したモーガンもプールに関心を示し，プールを作ったのかと尋ねたのが，彼女が最初に発した言葉だった．折ある毎に人々はプールの周りに集まり，プールは人々の愛と友好の象徴のようであるが，不安な要因も内包している．プールを作ったために，ヒルダには新たな心配ごとができた．めでたい結婚20周年のその日にもプールに落ちた蜂を助けるようルパートに頼むヒルダは，庭に住み着いているハリネズミがプールに落ちないかと，絶えず気にかけている．

このヒルダの心配は杞憂に終らなかった．後にルパートの愛を失ったと思い込んだヒルダは，プールにハリネズミが死んで浮いているのを見つける．マードックの作品では，彼女の水泳好きを反映して，泳ぐことや海など水に関連した描写は多い．この作品では，プールが，人々に喜びをもたらす明るい面と，命を奪う危険な面の二面性を持つものとして描かれている．ヒルダはハリネズミの死に涙するが，このハリネズミの死はさらに大きな不幸の前兆で，ルパートの死が暗示されている．

ルパートの死の予告はこれにとどまらない．ジュリウスのフラットでモーガンが服を返しに戻るのを待つ間に眠り込んだサイモンが見た夢は，不吉なものだった．母に導かれて行った先は墓場で，父の墓だと思ったが，埋葬されている人の顔はルパートだったというこの夢もまた，後のルパートの死を予告しているようである．

嫉妬深いアレックスから誤解されるのを恐れるあまり，ジュリウスのフラットに行ったことを話せなくて苦しむサイモンは，次第にプールから足が遠のく．心にかげりがなく水泳を楽しむサイモンと，秘密を持って後ろめたさを感じるサイモンの心の変化を，マードックはプールを使って巧みに描いている．暑い日に，ヒルダに泳ぐように勧められて，“I'm nervous of water, even in swimming pool.”（292）と答えるジュリウスは，イノセントなサイモンと対称的である．ここではイノセントさの象徴として水泳が描かれている．

プールはさらに重要な意味を持つ．ルパートの本の完成を祝うディナーパーティの日，ディナーが始まるので一同が家の中に入った時，ジュリウスを避けていたサイモンがプールからあがろうとするが，ジュリウスは笑いながら何度も彼をプールに押し戻す．繰り返し押し戻され，疲労で溺れそうになったサイモンを眺めるジュリウスには “laughing” という形容詞が 2 度も使われていて，彼の悪魔性が示される．無理やり見せられたジュリウスが仕組んだ “a puppet show”（392）と称するモーガンとルパートとの親密な語らいのことをアレックスには話さないと約束することを強要されて，やっとサイモンはプールからあがることが出来た．おとなしいサイモンもこの時ばかりは我慢ならず，反撃に出て，ジュリウスをプールに突き落とす．泳げないジュリウスは溺れかかって，大騒ぎとなり，ディナーは中止となる．帰りかけてジュリウスに呼び止められたサイモンが見たジュリウスは，“he [Simon] saw Julius's eyes glowing at him.”（374）と描写され，反撃を喜んでいるかのようだった．サイモンの耳元で “Well done!”（374）と囁くジュリウスの声は，さながら悪魔の囁きのようだ．人々の団欒の場から一転して，プールはサイモンそしてジュリウスをも飲み込む危険性を示すが，その危険な面を最も顕著に示したのは，ルパートを飲み込んだ時だ．モーガンを助けたいとの親切心から彼女と関わったルパートは，ジュリウスの策略に引っ掛かり，“a puppet show” の言葉が示すごとく，モーガンとともにジュリウスに操られる．日頃主張している善を実行しようとして，ヒルダに秘密にしたばかりに，妻を裏切っていると

いう良心の呵責に苦しみ，ルパートは睡眠薬に頼り，酒に溺れるようになる．彼の死は泥酔した上での事故と考えられるが，自殺か事故かは定かではない．

小さな秘密

作中人物の不幸は小さな虚偽から始まる．幸せな結婚生活を送っているヒルダにも夫に内緒にしていることがある．父親が十分な生活費を与えているにも関わらず，息子に甘いヒルダは夫に内緒でピーターに小遣いを与えている．一方，妻に秘密など持ったことのないルパートも，義妹のモーガンからアメリカ滞在中に金が必要になり，夫の口座から無断で金を引き出して使ったと打ち明けられて，タリスに返すようにと金を与える．姉の評価を気にするモーガンの懇願に負けて，結局妻に内緒にすることを約束してしまう．小さな嘘がさらに次の嘘に発展し，幸せな生活の崩壊へ繋がることにルパートは気づかない．

いろいろな相手との遍歴を続けてきたサイモンとの同居を始めるにあたって，完全主義のアレックスは絶対的な愛を求め，決して隠し事をしないことを約束させる．サイモンは，アレックスに内緒でフラットに来るようにジュリウスに言われ，不安を感じつつも，アレックスの誕生祝いの相談だろうと思って出かける．出かけたこと事体を内緒にしたために，そこで遭遇したことをアレックスに話せず懊悩する．ジュリウスが留守のフラットには，彼に洋服を切り裂かれたため裸のモーガンがいて，洋服を取りに行ってくる間貸して欲しいとサイモンは服を脱がされる．アレックスに対して秘密を持ったことを，その後ずっと深刻に悩み続けるサイモンに対して，アレックスに内緒でサイモンが本当に来るかどうか試すためだけに呼びつけるジュリウスの邪悪さは際立っている．

ルパートとヒルダ，アレックスとサイモンは，愛しあっているがゆえに悪魔的ジュリウスの格好の餌食とされる．どんなに愛し合っている人間でも自分は短期間に別れさせることが出来ると，ジュリウスは面白半分にモーガンと賭けをする．しかし，約束した当の相手のモーガンそのものを餌食にしようとするところに，ジュリウスの狡猾さが見られる．アレックスとサイモンを別れさせることは副次的で，道徳を説くルパートと，最近になって “free and innocent love” という考えに浮かれているモーガンとをくっつけようと企むジュリウスにとって，人の心を弄んだり，苦しめたりすることは，遊びのようなものだ．次の文は，後にタリスにことのいきさつを告白するジュリウスの言葉である．

> I said that anyone’s faith in anyone could be broken in no time by the simplest of devices.... Then we selected a victim.... Morgan wanted a demonstration of the frailty of human attachments. I decided that she should provide the demonstration. (414)

モーガンがかつて自分に送ってきた熱烈なラブレターはルパートへ，こっそり盗み出した，ヒルダが大切に保管していたルパートからヒルダへの愛情溢れる手紙はモーガンへと，ジュリウスは送る．モーガンからの手紙を受け取ったルパートは，義妹を助けるのは自分の義務だ，真の愛こそが迷えるモーガンを自立した人間にさせると考える．そしてそれが出来るのは自分しかないと自負する彼は，善の力を信頼している．

> To deceive Hilda, temporarily of course, had seemed simply an essential part of doing his duty to Morgan. Of course he was well aware how fond he was of Morgan, Indeed it was on his fondness that he was prepared to build. Only love will do, thought Rupert, real love, real caring. She needed love, as all human beings did. He would give her love, wise steady strong love, and this, he honestly believed, would set her free at last of the whole tangle, Tallis, Julius, himself. She would find then that she knew what to do about Tallis. She would become once more, of indeed perhaps for the first time, a whole person.... He had been supported in this resolution by his deep age-old confidence in the power of goodness. (358–359)

ところがルパートはモーガンの助けとなるどころか，ヒルダに秘密を持つ罪悪感から “We should tell Hilda.” と言い続け，“You must practice what you preach.” (326) とモーガンに言われる始末だ．正しいことを行うために必要な小さな嘘のはずだったが，ルパートの心は乱れ，遂にはモーガンにロンドンを離れて，何処かに行ってくれと懇願するようになる．

> ... terrible pain he felt at lying to her [Hilda] and the agony of having lost the daily contact of absolute trust and love. He besought Morgan to leave London. (325)

動機にやましさはないものの，妻に秘密を持つことはルパートを苦しめる．“I hate telling lies to

Hilda.... I can't carry on with this on a basis of deceiving Hilda. It's poisoning my life."（357）と思いながらも彼には打ち明ける勇気がない．秩序だっていた彼の生活は崩壊の危機にあった．

信頼を裏切られたヒルダの "Oh Rupert, I loved you so completely, I revered you, I trusted you—"（377）という言葉は，ルパートを打ちのめす．

モーガンもまた嘘をつく．ジュリウスのフラットで起きたことをアレックスに言わないよう,「どんな幸せなカップルにも小さな嘘はつき物だ」と，ジュリウスと一緒になってサイモンに口止めする．また，ヒルダや自分に付きまとうピーターに，ロンドンからしばらく離れると嘘を言って，ルパートと会うのを邪魔されないようにする．

サイモンはアクセルに，ルパートはヒルダに秘密を持つことで良心の呵責を感じるが，ジュリウスにはそのような感情はない．彼は嘘を付くのが平気なだけでなく，人にも嘘を勧める．夫の不実に泣く母の姿に驚いたピーターを安心させるために，なぜもっともらしい嘘を言わなかったのかと，ジュリウスはヒルダに言う．夫に裏切られた悲しみの中でヒルダは正常な判断が出来ず，ジュリウスのペースに乗せられる．息子を追って，嘘を言って安心させてほしいと頼むヒルダは，"Julius, you're an angel.... I really don't know what I'd do without you." と言い，ジュリウスへの依存心を示している．しかしこの時ジュリウスは安心させるどころか，父親とモーガンのことをピーターに告げており，モーガンと賭けをした時と同様，ピーターを安心させたと思い込ませてヒルダを騙している．

嘘をつくことでは，後に論じるタリスも例外ではない．彼は父に癌の告知が出来ず苦しんでいる．

邪悪なジュリウス

ジュリウスとモーガンの関係から，ジュリウスは愛が欠如した人間だということが分かる．彼の心がいつか自分に向くことを期待してモーガンは同居を始めたが，そのような心は彼には通じない．唯一彼が微かに人間らしい気持ちを示したのは，モーガンが彼の子供を内緒で堕したと告げた時だった．ヒルダもサイモンもどういうわけかジュリウスが苦手で，恐れている．これは二人が純粋な心を持っている証拠で，本能的にジュリウスの中に悪魔的なものを感じ取っている．

ジュリウスは善と悪について次のように語っている．

> ... the assumption that good is bright and beautiful and evil is shabby, dreary or at least dark. In fact experience entirely contradicts this assumption. Good is dull. What novelist ever succeeded in making a good man interesting? ... Evil, on the contrary, is exciting and fascinating and alive. It is also very much more mysterious than good. Good can be seen through. Evil is opaque.（223）

彼は悪についての自分の考えを実行する．"opaque" という通り，人々にはジュリウスの悪事が見抜けず，簡単に騙される．人間は人の不幸を喜ぶものだと彼は考えていて，"Most of us prefer our friends in tears."（221）とルパートに言う．これに対してルパートは正しいことを行うべきだと考えており，"It's enough for me if I can see the right thing to do and do it."（221）と答える．本の完成を祝って *Symposium* の中でやっているように皆で哲学論議をするのかとか（221），"cosy Platonic uplift"（222）とかルパートを皮肉るジュリウスが，愛を説く善人ぶったルパートを犠牲者に選ぶのは当然の成り行きだろう．

ジュリウスはいつも予告なく突然現れて人々を驚かす．しかも，常に暗がりに現れるという特徴がある．これは彼の悪魔性を示すものと考えられる．次はモーガンとルパートが夕暮れ時に明かりもつけずに話し込んでいた時の，ルパートを怒らせたジュリウスの突然の出現である．

> There was a sound behind them and the door began to open slowly. A tall pale-clad figure was seen standing in the gloom in the doorway. Morgan gave a little shriek and retreated to the window. "Switch on the light, please," said Rupert in a sharp voice. A number of lamps went on and the room sprang into brightness. It was Julius.（97）

ヒルダの留守中，ルパートが庭にいる間に勝手に家に入り込んだジュリウスにルパートが驚かされるシーンでも，ジュリウスは暗がりにいる．

> "Good heavens, Julius, you made me jump!" Julius had suddenly materialized in the half light upon the stairs in Rupert's house. It was about nine o'clock in the evening.（217）

次はルパートの留守中，ヒルダが一人で居るところにジュリウスが現れるシーンであるが，"Someone was standing in the half darkness. It was Julius."（321）と描写され，やはり彼が暗がりに立っているこ

とが分かる．“Hilda switched on another lamp.”（321）とルパート同様，ヒルダも無意識に明るくしようとする．それでも足らず，“She switched on some more lights.”（321）と描写されているように，彼女は一層明るくする．いずれのシーンでもジュリウスの突然の出現は快いものではなく，急いで明るくしようとする行為には，不安感が表れている．後にヒルダが彼の出現を歓迎するようになるのは，彼に操られるようになってからである．

ジュリウスは人の不幸や暴力を喜ぶ．人が困っている時に彼だけは嬉しそうにしていて，“smiling”という形容詞が多用されている．モーガンの夫タリスと鉢合わせした時，“Axel had covered his face with his hands. Julius was smiling and tilting his chair back. “Well, well, well.’ said Julius.”（85）と描写され，他の人の当惑をよそに，Julius はそのような状況を楽しんでいる風だ．電気もつけずに話し込んでいたルパートとモーガンの前に現れた時のジュリウスにも，2 度 “smiling” という形容詞が使われていて，驚く二人を見て，“Smiling, Julius closed the door.... Julius was still smiling, his eyes glistening.”（97）と楽しんでいる様子だ．

以下はジュリウスのフラットで，裸でモーガンを待っていたサイモンを前に，帰宅したジュリウスと服を返しに来たモーガンが，大笑いするシーンである．

> Julius began to laugh. Simon gave a sickly smile. Morgan looked detached, dignified. Then in a moment she began to laugh too. She and Julius laughed, falling about the room, swaying weakly with ever renewed paroxysms of helpless mirth.（170）

ジュリウスがもっとも激しく笑うシーンは，アレックスの誕生日に巨大なテディベアーをプレゼントした時だ．ジュリウスがアレックスの嫉妬心を皮肉って大喜びする様子は，“He smiled, giggled, laughed.... He nearly choked with laughter.”（307）と描写されている．また，特別な関係にあるかのごとく，サイモンに “a gleeful sign”（307）を送るだけでなく，思わせぶりに “I so much enjoyed our last meeting.”（308）と言ってアクセルの嫉妬心を掻き立てる．サイモンをプールから上がらせないで何度もプールに押し戻すジュリウスは “You are my prisoner, little one.” と声をあげて笑いながら，サイモンがもがくのを楽しんでいる．中華料理レストランでの暴力シーンでも，ジュリウスは一人だけ嬉しそうだ．不安そうなヒルダに向ける眼差しは “His dark thickly-lidden eyes gleamed at her, with reassuring humour, with pleading affection.”（344）と描写されて，一見愛情深く見えるが，実は内心ヒルダを苦しめて喜んでいる．

後にタリスにいきさつを話す時の “Extracting the utmost fun from a fascinating situation.”（406）や “It was really rather fun choosing the letters.”（406）という Julius の言葉から，いかに彼が人々を苦しめて楽しんだかがうかがえる．

アメリカにいた時，ジュリウスから期待されたことは，“To respond to his magic.”（92）だったとモーガンが述べているように，ジュリウスは魔力を持って人々を操り，自分の思い通りに彼らを動かす．そこにはジュリウスの邪悪な意思が感じられるだけでなく，マードックが “A novel is a comic form.”[3] と言っているように，テディベアーの件に見られるように，時として喜劇的要素さえ感じられる．

ヒルダはジュリウスに簡単に騙されてしまう．それはヒルダだけではない．モーガンに恋しているピーターには，モーガンとルパートの間に何かあるとほのめかすだけで十分で，あとは彼が勝手に想像を膨らましていく．それはアクセルも同様で，もともと嫉妬深い彼は，ジュリウスのちょっとした素振りから，サイモンとジュリウスの仲を疑い，嫉妬に苛まれる．サイモンが勇気をだしてすべてを告白する決意をした時，皮肉にも，アクセルはサイモンがジュリウスと一緒になるために自分の元を去ると告げるのだと思ったという．このように，嫉妬や不安や恐れを感じている人間は，物事の真実を見ることが出来ない．

善人タリス

この作品の登場人物の中で唯一タリスだけが貧しい人々の住む地区に住んでいる．彼の家は散らかり放題で，台所は汚れた皿や残飯で嫌な臭いがする上，家計の足しにするため貸している上階に住む移民の騒音が激しい．彼は始終体の痛みを訴えて息子を罵る父親の世話や，僅かの手当ての講義の準備に追われている．妻のモーガンの不実な行動に，言葉を荒げることもない．優柔不断すぎる，妻に対してきっぱりとした態度をとるべきだ，まともな暮らしが出来るだけの収入の得られる職につくべきだなどと，周囲の人間はタリスに批判的だ．ジュリウスが読者の注目を集める存在であるのに比べ，タリスは物語が進展するにつれて徐々に注目されるようになると Diana Phillips は指摘しているが[4]，作品を注意深く読むと，目立たない存在のタリスが，初めから終わりまで，常にバックに存在していることに気づく．ジュリウスと暮らす間も，タリスの “radiant not accusing”（152）な目にみつめられていて，彼

のことが片時も頭から離れなかったとモーガンはヒルダに告白している．ジュリウスの子供を躊躇なく堕胎したモーガンであったが，地下鉄の駅から出られなくなっている鳩を見かけ，その小さな命を懸命に救おうとする．地下深いところにいる鳩を何度も階段の上に追い上げて助けようとしているうちにハンドバッグを失くして，途方に暮れたモーガンがタリスを見かけたことが，“She saw his face clearly, anxious, sad, and beautiful-eyed.”（329）と描写され，ここでもタリスの目について言及されている．

モーガンはタリスについて，“There was a terrible fatal tenderness.”（94）や “I simply must not give way to that ghastly heartbreaking tenderness, that animal feeling.”（120）などと，彼のやさしさに度々言及している．“You have forgotten the quality of your happiness with me. We lived in an innocent world.”（284）と自分の元に戻ってくるよう呼びかけるタリスの言葉に耳を貸さないモーガンだが，鳩を見失い，ハンドバッグを失くし，パニックに陥り，何としてもタリスに会いたいと思う．以上のことから，タリスは絶対的優しさを持ってモーガンを見守ってくれる心の拠りどころであることが示されている．そして，他の男性に心を奪われている時も，モーガンがタリスを愛していることに変わりはない．

作品中，タリスの疲労に度々言及されている．これはタリスが人々の苦悩を自らのものとして背負っているからだと考えられる．“Tallis was framed for suffering. Let him suffer.”（120）と，モーガンはタリスの本質を理解している．マードックの最後の作品となった *Jackson's Dilemma* でも人々の苦しみを背負うジャクソンの疲労に度々言及されている．上の階の人が昨夜逮捕されたから眠れなかったとジュリウスにタリスが話すことや，タリスの家に行ったモーガンが，タリスがその夜は病人のところで過ごすと知ることから，タリスは惨めな暮らしの人や病人と共にいる人間だと考えるべきだろう．父に反抗的なピーターも，寂しくなると，一緒に寝てほしいとタリスに頼み，二人は一つベッドで眠る．タリスだけが強がりを言うピーターの絶望感を感じ取っている．

Peter Conradi はこの作品の草稿段階では，タリスの誕生が12月25日だという記述があったが，出版された版からはそれが消えていることを明らかにしている．[5] そのことからも，タリスはキリストを象徴していると考えられる．ビール瓶を開けようとして怪我をしたタリスの手にジュリウスは自分のハンカチを巻いてやる．白いハンカチにタリスの真紅の血が滲むシーンは十字架のキリストを想起させる．また，何度もヒルダに渡すのを拒んでいたモーガンの持ち物を，彼女からの要求で，車のないタリスがカートに載せて苦労しながら長距離を運ぶ姿は，キリストの受難を象徴していると Conradi は指摘している．[6] 全編を通じてモーガンに自分の元に戻るよう呼びかけているタリスは，迷える羊を探すキリストを想起させる．マードック自身もタリスについては “There is only one real saint as it were, or symbolic good religious figure in the books and that is Tallis.”[7] と述べている．

おとなしいタリスが別人のようになるシーンがある．中華レストランでジャマイカ人が暴力を振るわれているのを目撃し，止めに入ったサイモンの身が危険になった時，アクセル，ジュリウス，タリスの三人が入ってきて，タリスが一撃の下に悪人どもを撃退する．

ジュリウスとタリスの初対面の時，周りの人たちの心配をよそに，妻を奪われたタリスが先に握手の手を差し出して，ジュリウスに敵愾心を持っている様子がない．やがて二人の間には奇妙なコミュニケーションが成立する．二人の間のコミュニケーション成立の理由を，タリスはすぐにジュリウスが何者かを察知し，ジュリウスも初めは分からなかったけれど，やがてタリスが霊的な人間だと分かったからだと Christopher Bigsby は指摘している．[8]

ジュリウスは二度，自分の来訪を予期していたかとタリスに尋ね，タリスはいずれにも肯定的な返事をしていて，タリスが特別の予知能力を持っていることが示されている．二人のコミュニケーションの中で，タリスは誰にも言ったことのない妹の死の事実―レイプされて殺されたこと，父親が癌で余命が短いことなどを語る．一緒に暮らしたモーガンさえ気づかなかった強制収容所に入っていた証拠の刻印をジュリウスの腕に見つけるのもタリスである．この刻印について，マードックは悪魔的な人間も苦しんでいるということを示していると述べている．[9]

Phillips はジュリウスがタリスの前では不思議に人間らしさを示し，普通の人間のようになることを指摘しているが[10]，ジュリウスはタリスに率直に自分のしたことを告白する．タリスは一言も非難することなく，“They must all be told. At once.”（409）と実際的な助言する．タリスだけが正しい判断をしたことが，次の Axel と Simon の会話に表れている．

> The only person about the place with really sound instincts is Tallis. He led Julius straight to the telephone. Yes. Tallis was right. He saw how awfully perilous it was.（433）

ジュリウスはタリスの忠告には従順に従う．すぐに別荘にいるヒルダに電話して，すべてを告白した．ルパートの死後，すべてが明るみに出た後，ジュリウスはタリスに助言を求める．

> "Well, what am I to do?"
> "What do you mean?"
> "You know what I mean."
> "Oh just go away," said Tallis."I don't think you should live in the Boltons or Priory Grove. Go right away."（431）

ここでもジュリウスとタリスの間には細かな説明抜きで，コミュニケーションが成立し，タリスの助言は的確である．

シェイクスピアの作品との類似性

この作品の中には，シェイクスピアの作品を想起させる場面がいくつもある．ケンブリッジ大学からの帰り，美しい花が咲き乱れる草原でモーガンが *Tempest* の中のエリアルの歌を "Full fathom five thy father lies... " と歌うシーンは，後にピーターの父親が溺死することを考えれば皮肉であるとRobert Hoskins は指摘している．[11)]

バラのリースを頭にのせられて上機嫌のサイモンは，"Who am I? Puck? Ariel? Peaseblossom? Mustardseed?"（134）と踊り始め，ここでもまた，*A Midsummer Night's Dream* や *Tempest* を想起させられる．人々の平和な生活をかき乱すジュリウスは何度か "summer enchantment" という言葉を使い，愛すべきでない相手を愛している人々の魔法を自分は簡単に解くことが出来ると述べていることからも *A Midsummer Night's Dream* が念頭におかれていることは確かだろう．サイモンはアクセルとの仲を脅かすジュリウスとの関わりを，またルパートは立ち直らせる自信のあったモーガンとの関係を，そしてモーガン自身もルパートとの関係を "nightmare" と感じるようになり，さらには，ヒルダも夫の不実を "nightmare" と感じる．ルパートとヒルダの住む家 Priory Grove は森を意味していて，この平和だった屋敷にモーガンとジュリウスが登場して，"nightmare" が始まる．このことからこの作品においては *A Midsummer Night's Dream* の "dream" に対応するものとして "nightmare" が使われていると Hoskins は指摘している．[12)]

モーガンとルパートとの親密な会話をサイモンに証人として盗み聞きすることをジュリウスが強要するが，これは *Much Ado about Nothing* のヒーローの侍女とその恋人の逢引を盗み聞きさせて，ヒーローをふしだらな女と思い込ませるシーンや，*Othello* の登場人物イアゴが自分とキャッシオーの会話をオセロに聞かせるシーンを想起させる．ジュリウスは，人々の心を弄んで，意のままに操ろうとするが，悪意を持って故意に人々の運命を狂わせようとする人物は *Much Ado about Nothing* にも登場する．実態の無いことで大騒ぎになった状況は，*Much Ado about Nothing* と同様である．

それとなくほのめかして相手を不安な気持ちにさせるジュリウスの手法はイアゴに特有のものである．夫の様子に不安を覚えるヒルダがジュリウスと話す場面では，息子のピーターがモーガンに恋している話だと思っているヒルダに，"so you know?" "How did you know?"（295）とジュリウスは大げさに驚ろきを示す．そして "You're being very calm about it, Hilda.... Hilda, you amazes me,... I'll confess now that I've always admired you. Now I reverence you."（295）と，ヒルダの冷静さを誉めそやし，かえってヒルダを不安にさせる．ヒルダがピーターの話をしていると分かった時のジュリウスの長い沈黙と "Peter. I see. I'm sorry I — I thought we were talking of — something else — oh dear —" という言葉と，さらに，"Oh nothing. A complete misunderstanding. I mean, yes, of course I was talking about Peter."（296）と，誤解だったと言いながら，Peter の話だと肯定するジュリウスの様子は，逆に，ピーターの話ではないと明言していることになり，ヒルダの不安を煽る．

次はモーガンとルパートの間にはたいしたことはないと，ヒルダを安心させようとするジュリウスの言葉であるが，否定形ではあっても "love affair" という言葉を使うことによって，その逆のことをヒルダに強く印象づける結果となっている．

> I've told you, it's nothing at all. Perhaps a little infatuation on one side, a little kindness on the other. There's no – there's no love affair, Hilda.... a mere involvement.... there's nothing there,（323）

> We've so talked it over that it seems larger than it is. It isn't as if they were having a love affair or planning to run away or anything. It's just a momentary emotional patch in a brother-in-law sister-in-law relationship.... I never thought it serious. And you don't really either, do you, Hilda?（343）

以下はイアゴーがオセロに妻の不義をほのめかす場面であるが，ジュリウスがヒルダに彼女の夫と

モーガンの関係をほのめかす場面と驚くほど似ている．

Iago　Ha! I like not that.
Othello　What dost thou say?
Iago　Nothing, my lord; or if ? I know not what.
Othello　Was not that Cassio prated from my wife?
Oago　Cassio, my lord? No, sure I cannot think it
That he would steal away so guilty-like,
Seeing you coming.
Othello　I do believe 'twas he.
Othello　Act 3・3・35–40

Iago　But pardon me: I do not in position
Distinctly speak of her ;
Othello　Act3・3・235

Iago　Let me be thought too busy in my fears –
As worthy cause I have to fear I am –
And hold her free, I do beseech your honour.
Othello Act 3・3・255[13)]

二つの作品の前述の場面を比較すると，まずほのめかして不安に陥れ，そして次第に事実があると思い込ませる手法は共通である．

夫とのコミュニケーションが途絶えて，夫への疑惑に苦しむはヒルダは，"your very devoted servant" だと言うジュリウスへ，"You have been a tremendous comfort."（342）"You've been so kind, listening to all my obsessive worries –"（343）と，精神的依存度を増す．ヒルダに証拠を掴むよう，"Suppose he has given Morgan money. Suppose they have exchanged a letter or two,"（344）と巧みにジュリウスが話を持ちかけ，ルパートの机の中に自分が入れておいたモーガンからのラブレターを見つけさせるのは，*Othello*で，オセロが妻に与えたハンカチを，イアゴが自分の妻に盗ませ，不義の証拠として，キャシオーが持っているのをオセロに見せるのに似ている．ルパートの釈明に耳を貸さず，パリに行くと見せかけて実は別荘に行ったヒルダは，別荘での孤独に耐えかねて，ジュリウスに会いたいと思うほど彼を信頼している．これはオセロがイアゴを「正直者イアゴ」と呼んで誰よりも信頼し，妻への不信に悩むようになると，将軍と家来の役割が入れ替わったかのようにイアゴに支配されるようになるのに似ている．このように，ジュリウスとイアゴには多くの共通点が見られ，マードックがジュリウスを描く際に*Othello*を念頭においていたのは明白だろう．

結　び

人は羨やんだり賞賛される人にこそ欠点を見つけたがるというのがジュリウスの人間理解だ．彼はルパートに，"you know how malicious and sharp-eyed people are. And how they love to discover faults in those they envy and admire."（381）と語る．ヒルダに露見して動転するルパートに，"You are upset because your image of yourself is shaken and because Hilda's image of you is shaken.... idol falls to the ground."（381–382）と言い，善人のイメージが壊れて苦しんでいるのだと手厳しい．"You feel that you are upright and noble and generous. Your life is orderly. You gain satisfaction from comparing yourself with others."（226）と，ルパートの自信を感じ取っていたジュリウスは，何としても彼の虚栄心を打ち砕きたかったのだろう．そのため，ルパートは溺死でなく虚栄心のために死んだとタリスに語ったのだろう．モーガンもルパートが見かけほど頼りがいのないこと，善人ぶっているけれど実は弱い人間で，本当の善人は，そのことに自分でも気づいていない Hilda なのだと気づく．

> Who was always talking about helping people? Rupert. Who was always really helping people? Hilda. Only one failed to notice Hilda's virtue because she was unaware of it herself. And she treated her good works as jokes.（386）

プライドが高すぎて，真実をヒルダに告げられず，悲惨な死を迎えたルパートに対して，ジュリウスに反撃して，操られることを拒否し，アクセルに真実を語ったサイモンはアクセルの愛を取り戻すことができた．アクセルも自分はサイモンに厳格すぎたと，自己の非を悟った．サイモンの真心はアクセルの生き方を変えた．

Conradi はこの作品の中で最も成功したのはジュリウスだとして，"He [Julius] is a brilliant success."[14)] と述べている．"If there were a perfectly just judge I would kiss his feet and accept his

punishments upon my knees.”（226）と言うジュリウスは，数々の悪事を働いたけれども，正義を求める気持ち “earning for justice” も持っていることを Conradi は指摘している．[15] すべての事実が明るみに出た後，ジュリウスはタリスに “You concede that I am an instrument of justice?”（430）と尋ね，タリスはただ微笑しただけだと記述されている．マードックは “An author may leave certain things puzzling deliberately.” [16] と述べ，作者は意図的に何事かは読者にはっきりさせないまま残しておくものだとしているように，タリスの “smile” のはっきりとした解釈は難しいが，少なくとも，ジュリウスによって人々の真の姿が明らかにされたことは，肯定していると考えていいだろう．

マードックは，シェイクスピアのイアゴ的要素も大いに持ちながら，イアゴのような骨の髄まで悪人である悪魔の化身のような人物と違って，タリスの善なる力によって触発されて，人間味も持ち合わせるようになる悪人としてジュリウスを描いた．マードックはこの作品について，悪に対する善の敗北であると述べている．確かに，タリスがどんなに呼びかけても，モーガンは彼の元に戻ることはなかったし，善人と自認するルパートは命を失った．しかし，ジュリウスとタリスの間にコミュニケーションが成立したことを考えれば，完全な敗北とは言いきれない．

タリスの忠告に従って立ち去ったジュリウスは，パリでの生活を楽しんでいる．皮肉にもルパートの薦めたレストランでメニューを見る彼は幸せそうで，“The sun was warm upon his back. Life was good.”（447）という言葉でこの作品は締めくくられている．ここを去るようにと忠告したタリスにジュリウスは “This was an interim.”（431）と答えているが，今後もまたどこかで同じような悪事を働きそうな気配である．

文　　献

1）*The Daily Telegraph*, Thursday, January 29, 1970.

2）Murdoch, Iris：*The Fairly Honourable Defeat*. Penguin Books 17, 1972.
以後この本からの引用は本文中にページを示す．

3）Bigsby, Christopher：“Interview with Iris Murdoch.” *The Radical Imagination and the Liberal Tradition*：*Interviews with English and American Novelists*. Junction Books, London, 230, 1982.

4）Phillips, Diana：The Complementarity of Good and Evil in *A Fairly Honourable Defeat*. *Encounters with Iris Murdoch*. ed. Richard Todd. Free University Press, Amsterdam, 85, 1988.

5）Conradi, Peter：“*A Fairly Honorable Defeat.*” *Critical Essays on Iris Murdoch*. ed. Lindsey Tucker. G. K. Hall & Co., New York, 87, 1992.

6）Conradi, Peter：97.

7）Bigsby, Christopher：220.

8）Bigsby, Christopher：229.

9）Chevalier, Jean-Louis：“Closing Debate.” *Rencontres avec Iris Murdoch*. Caen Centre de Rechercnes de Litterature et Linguistique des Pays de Langue Anglaise, Caen, 76, 1978.

10）Phillips, Diana：88.

11）Hoskins, Robert：“Iris Murdoch’s Midsummer Nightmare.” *Twentieth Century Literature*. July 191, 1972.

12）Hoskins, Robert：192.

13）Shakespeare, William：*Othello*. ed. Norman Sanders. Cambridge University Press, 1984.

14）Conradi, Peter：92.

15）Conradi, Peter：93.

16）Bigsby, Christopher：217.

（平成17年12月10日受理）

A Conflict between Goodness and Evil in *A Fairly Honourable Defeat*

Nobuko HASHIMOTO

(Accepted Dec. 10, 2005)

Key words : love, goodness, nightmare, darkness, human frailty

Abstract

Devilish Julius says about human nature, "people love to discover faults in those they envy and admire". From this premise, he resolves to reveal the frailty of human bonds and of our confidence in goodness. His use of the words "a puppet show" exemplifies the Machiavellian way he manipulates people.

Rupert becomes the victim of Julius' malice because Rupert has a misplaced confidence in his goodness. Devilish Julius does, however, respond to goodness in the Christ-like Tallis and this shows some human warmth. So this story is a partial defeat of goodness by evil, but not a total one. Murdoch's portrayal of Julius is clearly influenced by Shakespeare's portrayal of Iago in *Othello*, however Murdoch's creation can respond to goodness and so is different from the satanic Iago.

Correspondence to : Nobuko HASHIMOTO Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: nobukoh@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 329–338)